

ウェブ上の自律学習による英語演習の展開

— 九州大学英语 B・B における「ぎゅっと e」 —

Web-based Autonomous English Learning
Gyuto-e for English IIB and English IIIB at Kyushu University

九州大学大学院言語文化研究院・准教授 鈴木 右文
Faculty of Languages and Cultures, Associate Professor Yubun SUZUKI

Abstract:

“Gyuto-e”, a web-based intensive English training system, was introduced in 2006 to English IIB and English IIIB in the current English curriculum of Kyushu University. In these classes, students grapple with reading, listening and grammar courses at their own speed in the style of computer-assisted autonomous learning. This article presents 10 advantageous aspects of the training system in its favor: 1) numerous questions, 2) economical fee, 3) autonomous learning, 4) suitability for hard workers, 5) useful learning management system, 6) instructor-friendly support system, 7) enrolling a large number of students, 8) division of labor between human teachers and computers, 9) adaptability of course contents, and 10) learning anytime anywhere.

Despite its numerous benefits, the system possesses some shortcomings as well. Some students find themselves to be only deficiently taken care of in the autonomous learning style and tend to adversely assess their classes on the term-final class evaluation form. Furthermore, some students are extremely slow in getting geared for exams and embark on a serious study just before them.

The present paper wraps up the discussion with the reference to two possible developments: 1) web materials that best fit Kyushu University students and 2) a class management where students are exempted from attending a class meeting in a designated time slot.

キーワード：自律学習 (autonomous learning), ウェブ学習 (web-based learning), 英語学習 (English learning)

1. はじめに

九州大学で必修である全学教育言語文化基礎科目では、英語に2科目のウェブ教材による自律学習を設けている。¹ 英語を履修する外国語に選択した場合、まず1年次後期に英語 Bがある。² また英語を第一外国語とした場合、さらに2年次前期に英語 Bがある。³ これら2つの英語科目の受講者は、「ぎゅっと e」と呼ばれるウェブ教材で学習を行う。本論文では、「ぎゅっと e」を利用した自律学習が英語カリキュラムの充実へ大いに貢献しているということを、多くの観点から主張する。第2節で九州大学の英語科目のカリキュラムを概観し、第3節で「ぎゅっと e」を使用した2つの授業科目の概要を見たうえで、第4節では「ぎゅっと e」のようなウェブ教材を使用した自

¹ 2年生以上を対象に、言語文化自由選択科目や言語文化古典語科目という枠もあるが、必修とはなっていない。

² 21世紀プログラムの学生は英語 Bではなく他の専用英語科目を受講し、また他学部でも検定試験による単位認定等で一部これを履修しない学生がいる。

³ 21世紀プログラム、医学部保健学科、芸術工学部の学生は英語 Bではなく他の専用英語科目を受講し、また他学部でも検定試験による単位認定等で一部これを履修しない学生がいる。

律学習の特長について検討することとする。第5節では若干の問題点についても検討する。最後の第6節は結論である。

2. 九州大学英語カリキュラムの概要

九州大学の全学教育の中に言語文化基礎科目があるが、その中に必修としての英語科目がある。2006年度から実施されている現行の英語カリキュラムにおいて、英語を第1外国語として選択した場合、文系学部と21世紀プログラムでは7単位、理系学部では6単位を履修する。⁴ 開講される科目は以下のとおりである。

- ・ 1年生前期：英語 読解中心（原則として推奨教科書使用）
英語 A パラグラフ単位の英作文・プレゼンテーション（統一教科書使用）
- ・ 1年生後期：英語 B 中級ウェブ教材の自律学習（読解，聴解，文法）
英語 A エッセイ単位の英作文・プレゼンテーション（統一教科書使用）
- ・ 2年生前期：英語 B 上級ウェブ教材の自律学習（読解，聴解，文法）³
英語 様々な授業から受講者が選択（理系学部では履修しない）
- ・ 2年生後期：英語 様々な授業から受講者が選択⁵

読解は第二言語として英語を学習している者にとっては基盤的技能であり、それだからこそ、従来より中学校や高等学校で読解が重視されてきたわけであるが、九州大学でも、カリキュラムの冒頭に英語 読解中心の授業を設け、大学における英語学習の基盤としている。⁶

2年次に配置されている英語 B は、担当教員が選択した教材によって実施される科目で、複数のクラスの中から受講者の希望をもとに配属クラスが決められる。内容は所属学部の専門性を念頭に置いて教員が選択している場合もあり、高年次の学習への接続を意識した科目配置となっている。⁷

これら2科目の間には、英語 A・英語 A，英語 B・英語 B という2系統の科目がはさまる。九州大学での英語教育はEGAP (English for General Academic Purposes: 一般学術目的の英語) を理念としており、学部や大学院での専門分野を内容とした英語による論文作成や口頭発表につなげるために、英語 B と英語 A を実践的な訓練として開講している。⁸ また、そのための下積みの訓練として、リーディングとリスニングのドリルと文法の学習を内容とした英語 B と英語

⁴ 1単位は週1コマ×15週の授業（半年）を前提とする。

⁵ 21世紀プログラム，医学部，芸術工学部，工学部機械航空工学科の学生は、英語 B ではなくて、それぞれの学部等に所属する専門課程の教員が担当する専用英語科目を受講する。

⁶ 英語 B は言語文化研究院英語科の英語 B 小委員会が選定して推奨するか、あるいは同委員会の審査を経た教科書を使用することになっていて、担当教員の恣意的決定によってクラス間で教科書の適切度にばらつきが生じにくいようにしている。かつては共通教科書として九州大学大学院言語文化研究院英語共通教科書編集委員会（2000）や九州大学大学院言語文化研究院英語 共通教科書編集委員会（2007）が使われた。

⁷ 英語 B では推奨教科書，英語 A・英語 A，英語 B・英語 B では統一教材が使用されるため、英語 B では担当教員毎に異なる教材を選択して、多様性を担保することとしている。

⁸ EGAP は ESAP (English for Specific Educational Purposes: 特定学術目的の英語) と対を成している。前者は全学教育・教養教育，後者は学部・大学院等での専門教育の中で実施されるものである。

Bを開講している。

3. 英語ⅡB・ⅢBの概要

第2節で見たとおり、英語 Bと英語 Bは、英語カリキュラム全体の中で、読解と聴解という受信型の2技能を高め、堅実な文法の知識を身につけることを目的としており、学術目的の英語力を伸長させる上で、必要欠くべからざる演習である。

現行では5つのコンピュータ教室を使用して、英語 Bは1年次後期に原則として21世紀プログラムを除く全員が受講し、英語 Bは2年次前期に原則として21世紀プログラム、医学部保健学科、芸術工学部を除く学生が受講する。多くの曜日時限で5教室が同時に運用され、英語 Bではその5教室を原則として2人の教員と5人のTAで担当し（授業としては2コマ）、英語 Bでは5教室を1人の教員と5人のTAで担当する（授業としては1コマ）。

教材は「ぎゅっとe」と呼ばれる商用教材で、広島市立大学の青木信之教授と渡辺智恵准教授によって問題が開発され、(株)北辰映電によりウェブ教材として配信されている。九州大学では、教材に使われる画像と音声为重いために学内に設置したサーバに置き、受講者の学習データは業者側のサーバに送信される。

九州大学では、ドリル演習として、リーディング、リスニング、文法の3つのコースが設定されている。⁹ 英語 Bのリーディングとリスニングでは中級（TOEIC450 650）の教材が使用され、英語 Bでは上級（TOEIC600 800）の教材となる。文法は英語 Bに前半、英語 Bに後半が割り当てられ、あわせて文法の全分野をひとつおきカバールするようになっている。¹⁰

受講者は、コンピュータ端末に向かい、教材上の認証操作を経た後で、全体管理者からのお知らせ、授業担当教員から受講者へ一斉送信された指導のメッセージ、授業担当教員から特定受講者へ送信された教材内メールを確認し、各コースのドリル演習に、個人のペースで自律的に取り組む。

リーディングは、1科目あたり40問あり、1問につき、300～400語程度の英文とそれに伴う8～10題の四択問題から成り立っている。まず英文を読むと、読解速度が計測されるので便利である。設問を解いていくときは、英文を見返さないことになっている。英文は比較的平易なものなのだが、隅々までよく読んでおき、設問を解く段になったら英文を参照できないということになれば、かなりしっかりと読み込まなくてはならず、その負担が読解力を高めるといふ仕掛けになっている。¹¹ 英文の内容は多種多様である。英文が難しかったときは、設問を解いた後で本文の和訳などを参照できるようになっている。

⁹ コースにはリーディング、リスニング、ポキャブラリー、スピーキング、ライティング、文法が用意されているが、九州大学ではリーディング、リスニング、文法、ポキャブラリーの4コースが教材に搭載され、ポキャブラリー以外の3コースの学習を単位認定の条件としている。

¹⁰ 実際に教材がどのようなつくりになっているのか、実際の問題はどのようなものか、といった詳細については、問題のトライアルができるウェブページ（<http://gyuto-e.jp>）を参照されたい。

¹¹ リーディングの速度は学生がじっくり読めば決して毎分100語を越えるような速度にはならないと思うが、実際には多くのクラスで132とか154といった平均数値になっており、もう少し細部にくらいつくように読んでもらいたいところである。中には平均361というクラスがあったが、残念ながら、そのクラスでは、あらかじめ英文と設問の画面の紙コピーが出回っていて、画面上ではまともに読む必要がないなどの不正常学習を組織的に行っていた可能性がある。

リスニングは英語 B で中級800問、英語 B で上級720問となっており、写真について正しいものを選ぶ問題、正しい応答を選ぶ問題、対話についての設問に答える問題など、TOEIC の出題形式になったつくりになっている。問題の内容は多種多様である。問題が難しかったときは、スク립ト等を参照できるようになっている。

文法は、英語 B で421問、英語 B で319問となっており、あわせて文法の主要事項全体をカバーするようになっている。問題の形式としては四択になっていて、難しかったときは、丁寧な解説を参照できるようになっている。

このようにして順に問題を解いていくのだが、受講者は自分のペースで学習を進めることができる。また、自分がそれまでどのコースを何問消化したのか、正解率はどうか、といった自分の学習データを参照しながら計画的に進められる。標準的には1学期に3回の中間試験を課すことになっており、試験範囲は全問題が3分割されることになる。受講者は中間試験の前日までに試験範囲の学習を終えることを求められているが、加えて、その範囲のおよそ8割程度が「ノルマ」として設定されて、これを試験前日までに終了していない場合は単位認定しない。いわば関所となっているわけで、学期の終わりの方で集中的に学習すればよいわけではなく、ペースメーカーの役割を果たしている。中間試験がなければ、授業中はただただ学習したり居眠りをしたりして、学期終了間際に問題の中身をまともに見ずにランダムにクリックして帳尻合わせをするような受講者が出てくるのが経験上わかっていたので、関門を複数箇所設けることによって、そうした学習態度による弊害を少なくしたということである。

試験範囲は本来こなすべき範囲であるが、家庭で学習に使用しているコンピュータ端末の突然の故障、試験直前に予定外の忌引きといった事態が考えられるために、「ノルマ」を試験範囲よりも少なく設定しているのであり、その「ノルマ」に到達しなかったケースを救えば「おまけのおまけ」になってしまうので、絶対防衛ラインと称して、受講者にノルマの厳守を指導している。各学期に1学年で数名、まともに学習を続けながらも「ノルマ」未達のために単位が取得できない受講者が出る。学習量は、標準的な能力の学生がまともに学習した場合、授業時間中の作業だけではこなすきれないはずで、コンピュータ教室の空き時間や自宅等での学習も必要になる。1週間のうちに、授業を含め、複数回の学習機会を持つように指導している。

問題は、どの受講者にも同じ順序で出題されるが、再び見たい問題を「復習リスト」に入れることができるようになっており、「この問題はもう見る必要がない」という用済みの問題はそのままにし、後日再見する必要がある問題については復習リストに登録する。試験前等適宜復習リストに入れた問題に再び取り組み、全ての問題が用済みになるまでつぶしていくといった利用方法が望ましいのだが、なかなか英語科目だけに時間が割けるわけでもなく、理想通りに勉強できる学生は多いとは言えない状態である。逆に言えば、まともに取り組みれば、授業時間だけの学習で早々に終了して残り時間のつぶし方に困るといった事態は考えにくいということである。¹²

中間試験は教室のコンピュータ端末上で実施する。学習した3コースの問題の中から出題され、

¹² 授業期間終了前に復習リストも含めて全問題が終了したという学生には、再度最初からやり直すか、ネットアカデミー2 (<http://gogaku.kyushu-u.ac.jp>) の学習を薦め、後者を選んだ場合は、学習範囲の報告をさせて、教員の判断で平常点部分へ反映させることもありうるものとしている。

結果は電子データとして保存されて、教員が単位認定の資料として利用することになる。この他、定期試験が実施されるが、こちらはリーディングの英文に教員独自の設問を付したもので、リーディング重視の姿勢を反映させたものであり、また教材内の設問の解答を丸暗記するような学習では対処できないようにしているわけである。

教員は、受講者からの質問に対応し、教材の管理画面を利用して受講者の学習状況を把握し、教材内掲示板に一斉指導のメッセージを掲出し、教材内メールシステムによって適宜受講者個人個人に指導を行い、TAに監督業務の指示をするのが日常業務になる。この他、中間試験と定期試験の運営と単位認定作業が必要になる。

教員用の管理画面では、受講者ひとりひとりの学習データとクラス全体としての平均データが様々な形で提示される。例えば、ある特定の受講者やクラス平均での1週間ごとの総学習時間・学習回数・コース毎の消化問題数、特定の受講者の各コースの単位問題数あたりの平均正答率・平均所要時間、問題毎のクラス全体の消化人数・平均正答率・平均所要時間、受講者毎の最終消化問題数の予想や学習適切度判定（詳細は第4節で後述）など、指導の基礎になるようなデータが多種多様に得られる。この他、特定の受講者の特定の問題の解答内容や、ログインしたパソコンのIPアドレスなどのデータも簡単に呼び出せる。

TAは、原則として各教室に1名おり、出欠の確認、自律学習の監督、教員への質問の取次ぎ、中間試験の補助などの役割を日常的に担う。従って、今のところ、自律学習と言っても監督側が無人の教室での学習や試験となっているわけではない。

4. 高い貢献

「ぎゅっとe」を利用した英語 B・英語 Bは、数々の利点を持っている。それらをひとつひとつ検討していきたい。それらは互いに関係を持ち、論点が重なる部分もあることを、あらかじめお断りしておきたい。

第1に、高密度学習を可能にしているという点である。大学における正規の英語科目の授業時間数は、竹蓋（1997）をはじめ従来から随所で指摘されてきているように、昨今学生に求められている実用的な英語力を開発するには少な過ぎる。そこで正課としての英語授業以外に個人が自発的に勉強することが望まれる（実は自分で何をどうしたらよいか一人で自立して学習できるようにすることが大学の正課での英語教育の主要な役割ではないかという気すらする）ほか、大学における英語授業の効率化が必要となるわけであるが、「ぎゅっとe」による授業では、従来の紙媒体の教材に比べて、消化される問題数が圧倒的に多い。「ぎゅっとe」と同じTOEIC型の大学用教科書を代表して鶴岡・マームグレン（2010）の問題数を調べてみると、リーディング（parts 6 7）が26問（設問で言うと82題）、リスニング（parts 1 4）が204問、文法（part 5）が90問であるのに対し、「ぎゅっとe」ではリーディングが40問（設問で言うと400題近く）、リスニングが720～800問、文法が319～421問もある。従って、「ぎゅっとe」では紙の教科書の3～5倍の分量をこなすと言える。紙の教科書を使用した授業では、教員が解説を行ったり、学生を指名して答えさせたり、TOEICの対策を語ったりする時間もあって、問題を解く以外にロスタイムになる部分も避けられないのに対し、「ぎゅっとe」では黙々と高速で問題を解くことに全時間集中することになる。解

説等で人間教師の出番がなくても、九州大学の学生であれば身になる作業であると言える。このような高密度学習は、自律学習の形態をとるウェブ学習一般に言えるメリットであろうと思われる。

第2に、教材が安価である点である。受講者から1科目分の教材費として徴収しているのは700円であり、前段落の鶴岡・マームグレン(2010)の定価1980円(税別)に比べても圧倒的に安い。¹³ また、「ぎゅっとe」の方が問題数が圧倒的に多いため、単価あたりの問題数となると、桁がひとつ異なるということになる。ただ、紙の教科書は授業後も残り、復習も随時可能であるのに対し、「ぎゅっとe」の場合は授業期間中だけしか利用が認められないので、単純にコストパフォーマンスを語るができない要因もあるわけだが、それを差し引いても、「ぎゅっとe」の優位は不動だと言えるように思われる。逆に、学習が済んだ教材が学習後も残るのは無駄と考えれば、一定期間に利用を限定する分安価で済むというのであれば、その方が好ましいと言うことすらできるかもしれない。通常の授業よりも教材費が安く済むのは明らかにメリットである。受講者の金銭負担が少ないのは望ましいことであるが、それも全学年で同時に利用すればこそそのスケールメリットでもある(「ぎゅっとe」は個人で利用すれば8週間で3000円)。この安価な教材というのは、「ぎゅっとe」の特長ではあるが、必ずしもウェブ学習一般に言えることではない。また、教材自体が安価でも、専用のソフトウェアの導入が必要であったりすれば、ソフトウェア自体の代価やそれをインストールするための費用など、余計なコストがかかることになるが、「ぎゅっとe」はインターネットブラウザさえあれば利用可能であり、OSがWindowsであるかMacOSであるかも問わない。¹⁴ ただ、画像や音声のファイルが重いために学内に教材用サーバを置くことが望ましいのであるが、特別に高性能のサーバは不要である。九州大学では年間にのべ4500人程度の受講者数になるため、1つのサーバを5年使用すると仮定し、保証費等の付帯費用込みで70万円と見積もっても、受講者に負担してもらった場合に一人あたり30円程度にしかない。¹⁵

第3に、自律学習がそもそも可能になるという点である。英語の授業を受ける場合、通常は一斉に進行するので、受講者によって異なる部分を学習するということはあるし、受講者によって進行のペースが異なるということもあり得ない。授業中に個人作業を含める場合もあるであろうが、全員同じ箇所の作業を求められるのが普通であるし、全員一斉に同じ時間を割り当てての作業となる。それに対し「ぎゅっとe」では、各試験前までに「ノルマ」の範囲の学習を終えなければならないという共通の制約はあるものの、受講者の都合に応じて、自宅学習を含めた学習密度の濃淡や3つのコースを学習する順序などが自由になる。従って例えば、何度でも聞きたいリスニングの問題があれば好きなだけ粘ることができるが、一斉授業でCDプレーヤなどから出題している場合にはこういう芸当はできない。実際の受講者の学習データを見ると、誰一人として似たようなペー

¹³ 九州大学では大学生協に受講者からの料金徴収を委託している。各クラスの生協総代による徴収と窓口での直接納入になるので、授業で何度連絡し締切を延長しても納入しない受講者が多く、全体管理者である筆者がかけずり回ることにもなる。

¹⁴ 動作環境は、WindowsXP以降(ブラウザはInternetExplorer7.0以降、Firefox3.0以降)、MacOS10.3以降(ブラウザはSafari Ver3以降、Firefox3.0以降)、回線はISDNから対応している。

¹⁵ ネットワークやCALLのインフラに大きなコストがかかっている分を考えれば決して安価ではないという反論があり得るが、ネットワークはそもそも別途十分必要性が認められているので問題にはならない。CALL教室のインフラも、学生が必ず携帯コンピュータ端末を持ち歩く時代になれば問題にはなくなる。日本でもいくつかの大学が学生のコンピュータ端末必携を方針としている。

ス配分で学習している者はいない。例えば2010年度後期月曜4限の英語 Bのクラスでは、第3週目(第3週目の授業日から数えて7日間)のリスニングの消化問題数は、最低の受講者で0問、最大の受講者で270問と大きく乖離している(クラス平均は47.7問)。¹⁶ また、受講者が文法の学習にどのくらいの期間をかけているかを見ると、早い受講者は第5週で全問終了し、遅い受講者では最後の第15週までかかっていて、学習ペースが受講者によって大きく異なる。それぞれに快適なペースや学習順というものがあるわけで、その隔たりも大きく、それらを尊重できる自律学習に大きな利点があるというわけである。

第4に、学習を深めたい受講者にも対応できる点である。2010年度後期月曜4限のクラスについて、1学期でどれだけ学習時間があつたかを、最後の第15週まで学習を続けた受講者について調べてみると、最少で10時間51分と授業時間(90分×15週=22時間30分)よりもはるかに短く、最大で143時間33分と授業時間の10倍以上に達する。短い方は授業を休んだり遅刻したりした上に、授業時間中に教室にいても監視の目をかいくぐって他の作業をしていたり、教材を使用している場合でも乱雑に学習し、授業外ではほとんど学習していない、というようなことではないかと想像される。最後の週まで学習を継続した学習者の中で、学習時間が授業時間よりも少ないのは301人中73人で、正直なところ、このクラスに関しては、最低限の努力で形式的に単位取得条件を満たし、それ以上のことはできるだけしないようにした受講者たちがかなりいたものと考えられる。これに対し、授業時間の倍以上学習した受講者も301人中21人おり、授業時間に加えて1週あたり1時間以上学習した受講者は41名にもものぼる。これらの受講者たちは、正答できなかった問題を復習し(再度見たい問題は復習リストに入れることになっている)、通常では読まないか読んでもざっとしか読まない解説をしっかりと読み、中間試験に備えた試験範囲の復習を行うなど、かなりしっかりと勉強しているものと言える。このように、よりしっかりと学習したい受講者にも「ぎゅっとe」は対応できているものと言えよう。それも豊富な問題数と解説のおかげである。こうしたことは、スペースの制約があつて、より少ない問題数しか扱うことのできない紙の教科書で授業を行った場合には、大変実現しにくいことである。ウェブ教材では、紙面を特に気にする必要がないのである。

第5に、受講者が自分の学習データを参照できるなど、デジタルならではの学習マネジメントシステム(LMS: learning management system)が充実している点である。ある時点までの正答率の平均などは、紙の教科書を使用していたのではつかみにくい点である。リーディング用の英文を読む速度の計測も、時間制限のある検定試験の対策に役立つ上、速読の能力の向上の過程が数字により自分で観察できる。また、復習の必要を感じた問題のみを復習リストに登録する仕組みになっており、征服できていない問題を次第に減らしていく学習の仕方がわかりやすい。これらはどれをとっても、紙の教科書を使用した授業では実現が困難である。授業期間をいっぱい使ってちょうど問題を終わらせるペースに対して、自分がより進んでいるのか遅れているのかが、ログインの度毎にわかるようにもなっており、ペースメーカーの役割を果たしている。このようにコンピュータシステムで学習すればこそその様々の利点がこの教材には見られる。

¹⁶ 第3週目を選択したのは理由がある。第1週目には初回の授業があり、授業方法の説明書を読み、コンピュータ端末や教材の試用に充てる時間がかなりあるため、参考の数値が得られにくい。第2週目は授業日が祝日で休みであったために、やはり数値が参考にならないと判断した。

第6に、教員が受講者ひとりひとりの学習状況を把握しやすい点である。第3節で見たような様々のデータを閲覧することができ、指導や成績判定に役立てることができる。指導を行う必要が感じられるケースとしては、他の受講者よりも進行が遅いかあまりにも早すぎる場合、ひとつのコースばかり学習を進めている場合、逆にひとつのコースにいつまでも手をつけない場合、リーディングの速度が速すぎるデータが連続している場合、正解率が異様に高いか低い場合、問題に答えるための所要時間が早すぎる場合、同じ選択肢が連続する場合（例えば10問連続Aと答えているような場合は、問題文や選択肢を読まずに機械的にクリックしている可能性がある）などが考えられる。これに対し、紙の教科書による授業であれば、試験を行わなければ授業の成果を確認することはできないし、平素の学習行動がどうなっているかをひとりひとりの受講者について確認することも難しく、ましてや1週間毎の学習状況を比較した上での指導などは無理である。

第7に、大人数での授業運営が可能な点である。大人数での授業運営が可能だとなぜよいかと言うと、一方で、英語 A・英語 A という英作文・プレゼンテーション演習の少人数クラスを成立させることができているからである。九州大学の英語教育を主導的立場で運営している部局である大学院言語文化研究院をはじめとした学内の部局の専任教員と非常勤講師とをあわせて、全学教育の必修の英語科目の担当が年間で386コマ（2011年度）あるのに対し、文系13クラス7単位と理系37クラス6単位をカバーするのに、仮に学部のクラス（入学定員ベースで26～68名、平均は約53名）毎の開講とした場合に必要な年間開講コマ数は320である。その差は66コマで、これでは現在平均約24名で実施している英語 A・A の体制に必要な「学部クラス毎開講の場合の年間開講コマ数にプラスすること112コマ」の半分強しか捻出することができない。従って、英語 B・B を大人数クラスで運用することにより、卒業に必要な6～7コマの英語科目のうち、少人数の作文クラスを1コマではなく2コマ設定できているという勘定になる。このために学生の英文作成力の向上を図る少人数制の授業を2コマも実施することができているわけである。ではどのくらい英語 B・

B から作文クラスへ回す余力が生まれているのか。英語 B では学部1学年のクラスで50（21世紀プログラムを除く）に対して17コマ、英語 B では学部1学年のクラスで42（医学部保健学科、芸術工学部、21世紀プログラムを除く）に対して10コマだけの開講となっている。学部クラス毎開講の場合2科目では90コマ必要であるから、実に63コマの余裕が生まれることになる。これでいて、第1の利点で見たように、通常の授業よりも高密度な学習を実現しているのであるから、大きなメリットであると言える。

学習が高密度と言っても、大人数の授業であれば、教員による監督が手薄になるのではないかという心配があるかもしれない。しかし、いくつかの工夫によって、それをカバーする措置がとられている。中間試験が機械による自動採点であることもそのひとつであるが、大人数の受講者を扱う上でもっとも教員の平常業務の助けになっているのは、教材の管理ツールの中にある学習適切度判定機能である。教員がこの機能の画面を開くと、受講者毎×週毎の学習行動が適切であるかどうかの判定が一覧表の形で示される。不適切学習があった場合は、その不適切度（提出されたすべての課題を分母とする不適切学習した課題数の割合）に応じた濃さで表のボックスに色がつくため、一見して誰にどれだけ不適切学習があったかがわかり、指導が必要な学生が誰で、いつの時点のどのコースの問題が問題であるのかが一目瞭然であり、素早く指導につなげることができる。不適切

学習とは、リーディングでは読み速度が分速500語以上の場合、リスニングでは解答までの時間が3秒以下の場合、文法では解答までの時間が2秒以下の場合である。こうした行為があれば、まともな問題に取り組んでいるとは到底言えない。

第8に、人間と機械の分業が図られて人間教師の有効活用につながる点である。受講者の英語学習が進められる中で、人間教師が担当してこそ意味のある部分と、機械でも支援ができる部分とに分けられる。例えば、文法はひととおり高等学校までで学習しているわけであるから、それをしっかりさせ発展させるための演習そのものを、人間教師による一斉授業で実施しなければならない理由はない。単語を強制注入するのも個人ですべき作業であるし、リーディングやリスニングの作業そのものも、教師が話している間にはできない作業である。こうした「作業」を人間教師がメンターとなり指導監督することは必要である（それをしなければなかなか作業に力が入らない）としても、作業そのものは機械で行った方が受講者のペースでできる。英語 B・B では、このように、人間教師をメンターの役割に限定し（限定されてはいてもそのメンターの役割は必須である）、作業そのものは機械化することによって、人間教師による一斉授業ではこなしきれない量の問題をこなすことができる。また、この方法をとる英語 B・B があることにより、英語 A・A という作文・プレゼンテーションの科目が少人数クラスで実施されている。この科目では、平均24名前後の少人数であればこそ、プレゼンテーションを全員に課す余裕が生まれ、課した作文課題を担当教員が1週間で添削することができるのである。これに対し、もし平均53名前後の学部のクラス毎の開講であったならば、受講者数が多いため、1回のプレゼンテーションの本番の実施だけで2回分以上の授業回数を使ってしまい、添削には2週間以上かかることになってフィードバックとしては遅すぎるということになってしまう。このほか人数が少なければ何かと授業運営にプラスがあるのは明らかであるが、いずれにせよこの科目は、作文やプレゼンテーションを準備するためのグループワーク、教員による作文の添削やプレゼンテーションの指導など、自律学習による機械中心の授業運営では到底運営できないものであり、人間教師の面目躍如という場面に満ちている。まさに人間教師が関わるべき科目である。

第9に、教材にきめ細かい配慮が可能になる点である。紙の教科書で修正事項が生じた場合、そう簡単には修正が効かないが、ウェブ教材の場合は容易に修正できる。現に「ぎゅっとe」でも、問題の不備が指摘されるたびに即日修正が施されてきた。全面改訂ともなれば紙の教科書は製作しなおさなければならないが、ウェブの場合は変更のない部分をそのまま利用でき、手間もコストも節約できる。このような編集加工の利便性は、ウェブ教材の特徴である。

最後に、授業の場所的・時間的束縛からの解放につながりうる点である。現在実施している英語 B・B では、通常の授業と全く同じ単位認定システムに乗っているため、成績判定にあたり、出席が考慮され、平常学習の様子が学習履歴のチェックによって加味され、中間試験や定期試験の成績が重要となっている。つまり、授業や試験の際は特定の曜日時限に特定の教室に集合して作業することが求められているわけであり、時間的・場所的に束縛されていることになる。通常の授業はこれでよいのであろうが、ウェブ学習の利点を活かして、時間的・場所的束縛から受講者を解放することが、しようと思えば物理的には可能である。事実、受講者による授業評価アンケート等でも、そのような解放を求める声が聞こえてきている。そもそも英語 B・B では、授業時間以外の学習、

授業実施教室以外での学習が加わることを前提としており、授業時間帯や授業教室を設定しなくても平常の学習は実施しうる。混雑した時間割の中で、これら2つの科目が時間割枠の中から姿を消し、コンピュータ教室の確保も不要となれば、時間割と教室のやりくりに腐心している大学にとってもメリットは大きいはずである。担当教員にとっても、教室に出向かずに、いつ学習の様子のチェックや指導を行ってもよいということになるのは利点である。以下、受講者が本人所有のノートパソコンや携帯端末を使い、学内では空き時間に無線LANで接続し、自宅等ではそれぞれのネットワークに接続して学習するケースを想定して検討する。

遠隔授業は、そもそも現行の大学設置基準第25条第2項

「大学は、前項の授業を、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室以外の場所で履修させることができる。」

により認められており、同基準第32条第2項

「第1項の規定により卒業の要件として修得すべき124単位のうち、第25条第2項の授業の方法により修得する単位数は60単位を越えないものとする。」

によって、英語 B・Bの2単位なら、学内規定が整備されれば十分想定の場合での単位認定が可能であるものと考えられる。しかし、菊池(2006)にも取り上げられているように、遠隔教育実施にあたっての配慮が、早くも1997年に大学審議会が出した「『遠隔授業』の大学設置における取扱い等について(答申)」に掲載されており、そこにある諸事項は、実際に遠隔教育による授業を実施するにあたっては、遵守できるものであるかどうかを検討すべきものと思われる。「『遠隔授業』の実施形態」として、同答申は下記のように述べている。

「『遠隔授業』の実施形態」

- (1) 現行の大学設置基準第25条の授業を、隔地の教室、研究室またはこれに準じる場所において同時に行うものであること。(同一校舎内の複数の教室間を結んで行う場合や、送信側には教員のみがいて学生がいない場合も含む。)
- (2) 多様な通信メディアを利用して、文字、音声、静止画、動画等の多様な情報を一体的かつ双方向に扱うことができる状態で行われること。
- (3) 大学において、直接の対面授業に相当する教育効果を有すると認めたものであること。

想定の場合について考えると、(1)については、校内もしくは学外の任意の場所で行われることになるが、ネットワーク環境がある限り、「これに準じる場所」と考えてよいと思われる。しかし「同時に」という部分は満足できない。だが、この答申が出された時点において、非同期型のe-learningは全く想定されていなかったと考えられるので、筆者固有の意見を述べれば、同時に実施した場合と同等の学習効果があると認められる場合には、「同時」でなくてもよいのではないかと

思われる。(2)については、教材に文字、音声、静止画が含まれる点は答申の記述に沿うのだが、「双方向に扱えることができる状態」というのが問題になるかもしれない。しかしこれも、非同期型の利用方法が念頭にあれば別の表現になったものと思われる。受講者側からは解答情報等が送信されるので、「双方向」であることには違いない。(3)については本論で既に効果が大きいことを明らかにしており、学内でそれが認められれば、後は規定の整備を待つだけという状態である。

さらに同答申では、「遠隔授業」を実施する際に配慮すべき事項」として、下記の事項が挙げられている。

「遠隔授業」を実施する際に配慮すべき事項

- (1) 授業中、教員と学生が互いに映像・音声等によるやりとりを行うこと。
- (2) 学生の教員に対する質問の機会を確保すること。
- (3) 画面では黒板の文字が見づらい等の状況が予想される場合には、あらかじめ学生にプリント教材等を準備するなどの工夫をすること。
- (4) 「遠隔授業」の受信側の教室等に、必要に応じ、システムの管理・運営を行う補助員を配置すること。必ずしも、受信側の教室に教員を配置する必要はないが、必要に応じてティーチング・アシスタント (TA) を配置することも有効である。
- (5) メディアの活用により、一度に多くの学生を対象にして授業を行うことが可能となるが、受講者数が過度に多くならないようにすること。

これらについてもクリアできると考えられる。(1)は、リアルタイムで講義を配信するスタイルの遠隔授業を念頭に置いたものであるため、本論で想定しているケースでは、教材の配信と解答情報の送信をもって問題なしと考えておく。(2)については、リアルタイムではないものの、教材内メールシステムにより、担当教員と受講者とのやりとりができるため、配慮はなされていると見なすことができるものと考えられる。(3)についても、そもそも想定しているケースでは黒板を使うことがないのだが、学習の進め方についてはプリントを配布しており、教員や全体管理者からの連絡や指導の内容は教材画面上で確認できるのであるから、求められている工夫は成し得ていると見なすことができよう。(4)については、受信側の機材がすべて大学側の用意したものであることを前提にした答申内容と考えられるため、受講者本人に管理責任のある端末で学習する限りは、補助員は不要と考えられる。(5)も、人間教師の授業を中継するような利用形態を念頭に置いたものと思われる。そうした場合に通常の教室に収容する人数以上の受講者を安易に許しては授業が劣化するという危惧の現れであると思われる。しかし本論で想定しているケースでは、個人の自律学習を前提にしており、単独での作業であるのだから、受講者数の多寡はその単独での作業のしやすさに全く影響を与えないのであり、問題となるとは思えない。

しかし、教員が同時に監督していない状態で自宅において受講者が学習するという場合に、それが大学設置基準に言うところの「遠隔授業」と見なすことができるかどうかの問題になることも考えられなくはない。そこから先の考察は、本論の時点ではまだ困難である。

但し、本論で想定しているケースのような授業方法については、そのような形に進むことができ

るということを主張しているに過ぎず、そちらに向かうべきであるとか、九州大学ではそのようにすべきであるなどと主張しているつもりはない。その理由のひとつには、試験の実施方法が問題となるということがある。また、この本論で想定しているケースの授業方法を採用した場合の単位認定の要素の中にもし平常学習が入るとすると、本当に本人が学習しているかどうかの確認が必要になるわけだが、これが実は難しい（こうした遠隔教育における本人確認方法の試み（指認証システム）については鈴木（2010）を参照されたい）。もし本人確認を不要とし、最終試験だけでできれば途中のプロセスは問わないということになれば、これらの科目を単位認定専用科目として、教材の中からの出題を中心に定期的に学内検定試験を実施して単位認定していけばよいかもしれないが、そうしたやり方を採用すると、恐らく、きちんと学習する学生とそうでない学生の間に見られる学習の質や成果の差が、通常の授業でよりも一層拡大していくのではないかという心配がある。というのは、試験日が遠いと学習に身が入らず、どうしても駆け込み的な学習に陥り、よい結果を得られない受講者が多くなるだろうからである。そのことは、実際の授業データから裏付けられる。詳細は鈴木（2008）を参照願うが、追い込み型の学習をした受講者（学習ゼロの週が断然多い）は、1問あたりにかける時間が平均のざっと半分くらいであり、雑な学習となってしまうことを確認した。また鈴木（2009）では、授業でのデータに基づき、リーディングとリスニングに駆け込み学習が見られ、試験での高得点者が低得点者に比べて、週毎の学習量の上下動がより少なく、駆け込み学習の度合いがより低いという観察結果を報告している。従って、検定試験を実施して単位を認定する方法は、実施するのであれば慎重な検討と工夫が必要である。

5. 問題点

第4節で見てきたように、「ぎゅっとe」による授業には利点が数多くあるが、問題点もいくつか指摘することができる。

まず、残念ながら、学生による授業評価が他の英語科目に比べて高くない。だが、これには理由がいくつか考えられる。第1に、評価項目の中にある項目で、英語 B・Bの授業方法ではそもそも高評価が与えられそうにないものが多く含まれているということである。例えば「授業担当者に教えようとする熱意があった」「授業担当者に学び続けている者の姿勢を見た」「授業担当者は学生の理解度を把握して授業を進めていた」といった項目は、教員が直接教えることがないため、あえて評価ランクを選ばなくてはならないとしたら、ゼロ評価とせざるを得ないと考える受講者が多くても不思議ではない。またドリル訓練を主な作業としていることから、「調べて検証し考察する方法を経験する学びだった」「考えや意見に共感し合える仲間との出会いがあった」といったような項目に関しても不利である。さらに、授業の進行ペースに関する項目は、原理的に自律学習の授業になじまない。第2に、他の英語科目よりも、もしかしたら負担感が大きかったのではないか。密度が高い学習内容になっているため、英語科目は卒業のため最低限の努力で切り抜ければよいという受講者がもしあれば、こうした授業は歓迎でないはずである。この授業では終始頭を回転させることが求められるので、単位のためだけに学習させられるという意識があると、他の授業よりも辛いかもしれない。もっとも、それだけきちんと作業させる授業になっているということの証だとも言えよう。このように、授業評価だけでは、この授業が開講に値しないという結論にはならな

いものと思われる。

次に、人間教師と受講者との触れ合いがほとんどないため、受講者によっては、いくら勉強になるとは言っても、いわば放っておかれているという気持ちが強く働く。それが前段落での授業評価アンケートにも響いているものと思われるが、この授業があるがゆえに第4節で見た様々の利点が得られるのであり、授業の密度も濃く、それらのことを勘案した上で、全体として評価されるべきものである。受講者が持つ孤立感は、ある程度仕方ないということであるが、時代の推移とともに機械と人間の分業が進む中で発生している新しい事態である。また、これは孤立「感」であって、本当に放任しているわけではない。教員は学習状況把握し、問題があれば指導することになっているわけで、監督されているという感覚を受講者が持つように工夫しているところである。

また、どうしても試験直前の駆け込み学習が多くなる。コンスタントに学習するのが一番良く、そのように受講者を指導しているのであるが、中間試験、定期試験の直前になってノルマの範囲をバタバタとこなす受講者が多く見受けられる。鈴木(2009)によれば、2008年度のある授業で、第2回中間試験の範囲を学習する6週間のクラス平均の消化問題数を見ると、表1のように、明らかな駆け込み学習が観察できる(試験直前の第6週の数値が目立って高い)。

表1

	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週	第6週
リーディング	1.4	0.6	1.9	1.5	1.2	7.0
リスニング	33	11	45	60	23	103
文法	36	11	24	28	14	35

これでは、最後の方の問題の学習はかなり雑になっているはずであり、コンスタントに学習してもらうため、コンスタントであるかどうかを平常点に加味すると発表したり、常日頃から安定した学習が好ましい旨指導を加えたりするのだが、この傾向は消えず、毎学期繰り返される。だが、これはe-learningに限ったものではないのではないかという気がする。ましてやウェブ教材の中でも「ぎゅっとe」だから生じる問題というわけではないものと思われる。

さらに、教材の内容やレベルが九州大学の学生に最適であるのかどうかという問題がある。例えば2010年度後期のいくつかの英語Bクラスの平均正解率は、表2のようにになっている。

表2

	リーディング	リスニング	文法
文学部	72%	81%	75%
法学部	70%	78%	76%
経済学部理学部混合	70%	75%	73%
芸術工学部農学部混合	65%	75%	73%
工学部	63%	70%	69%

この正解率を見る限り、難易度は適切であるように思われるが、リーディング用の（設問ではなく）英文が平易であるという批判が担当教員の間にある。これは、英文の内容をすみずみまで憶えて、英文を見ずに後の設問を解くという設計になっているためなのであるが、確かに英文自体は読み応えという点では九州大学の学生には易しいかもしれない。また、文法についても、ジェスチャーや文化項目など、幅広い問題としたいという意見も教員の間であり、九州大学側で独自の問題を制作し、「ぎゅっと e」以外の LMS (learning management system) に搭載して、類似の e-learning を展開したいという希望も持っている。

また、中間試験の「ノルマ」を達成しないと単位認定できないこととしているのだが、「ノルマ」が試験範囲の 2 割程度の余裕を見て設定されているにもかかわらず、それを達成せず、まさか本当に単位認定がされないとはと相談してくる受講者がいる。本来はこういう受講者に単位認定を拒まなくても「ノルマ」の達成がなされるような方策があればその方が望ましい。

最後に、授業の開講方法自体が適切かどうかという問題がある。受講者、教員、学内関係者などから、この授業に対し、それぞれ改善の提言が寄せられている。中でも受講者からは、わざわざ教室に集まって一斉に作業しなくてもよいのではないかという感想をよく耳にする。教員からも、授業担当者の業務が、必ずしも教員が担当しなくてもよいのではないかという意見をいただく。学内関係者からも、担当教員なしで運用できるのではないかという耳打ちをいただく。しかしそれが妥当な方向であるかどうかは熟慮を要すると思っている。

6. おわりに

九州大学英語 B・英語 B が現在実施している、ウェブ教材「ぎゅっと e」を利用している、多人数クラスでの自律学習について、その多くの特長と、若干の問題点について考察した。全体として、現行の授業方法を肯定的に評価できるということを主張したつもりである。デジタル時代に、その特性を活かし、一部英語カリキュラムの中に取り入れ、カリキュラム全体としての効果を最大化していく狙い自体は特に問題があるとは思われない。これをどのように改善、発展させていくかが今後の課題ということになるであろう。

参考文献

菊池俊一 (2006) 「『e-Japan 戦略』による e-Learning の普及について」、名古屋外国語大学外国語学部紀要、第30巻、33-58頁。

九州大学大学院言語文化研究院英語共通教科書編集委員会 (徳見道夫・ビーター＝ローリングズ・大津隆広・鈴木右文) 編 (2000) 『A Passage to English: 大学生のための基礎的英語学習情報』、九州大学出版会。

九州大学大学院言語文化研究院英語 共通教科書編集委員会 (徳見道夫・江口巧・大津隆広・志水俊広・鈴木右文・田中俊也) 編 (2007) 『A Passage to English: 大学生のための基礎的英語学習情報』第5版 (全面改訂)、九州大学出版会。

鈴木右文 (2008) 「大学英語 CALL 授業での自律学習における受講者の行動」『言語科学』(九州大学大学院言語文化研究院言語研究会) 第43号、87-93頁。

- 鈴木右文 (2009) 「CALL でのコンスタントな英語自律学習と試験結果との関係」『言語科学』(九州大学大学院言語文化研究院言語研究会) 第44号, 83-92頁.
- 鈴木右文 (2010) 「英語遠隔授業における本人認証について 指静脈認証システムの試み」『言語科学』(九州大学大学院言語文化研究院言語研究会) 第45号, 69-78頁.
- 竹蓋幸生 (1997) 『英語教育の科学 コミュニケーション能力の養成を目指して』アルク.
- 鶴岡公幸・Gary Malmgren (2010) 『*Get Your Best Marks for the TOEIC Test!* シチュエーションごとに解く TOEIC 完全対策問題集』, 松柏社.